

古美術商・西洋アンティーク評論家 岩崎 紘昌氏に聞く

聞き手 山岡 三子 ●フリーアナウンサー・名古屋短期大学客員教授

山岡 今回は、古美術商で、西洋アンティーク評論家としてもご活躍されている岩崎紘昌さんにお話をうかがいます。

中央大学法学部卒業と同時に、日本ではまだ珍しかった西洋アンティークの輸入販売業をスタート。今では、この道四〇年以上のキャリアを有する第一人者でいらつしやいます。

「田舎に帰る」「東京でバイトする」「世界を旅する」から選んだこと

山岡 まずは、学生時代に二年間大学を休学して、世界旅行をなさったとうかがったのですが、そのときのお話からお聞かせいただけますでしょうか。

岩崎 僕が大学に入学したのは昭和四十年のことです。団塊世代の初期ですが、当時は学生運動真っ盛りのころで、大学はほぼ閉鎖状態でした。

当時のことを振り返ると、大学に行つて勉強した記憶があるのは一年半ぐらいですね。当初はそれなりに勉学に打ち込んでいたのですが、司法試験に落ちてしまつてからは、早々と法律の勉強にも見切りをつけ

たんですよ。

一方で、僕は政治や学生運動に無関心でしたから、学生運動にも参加しませんでした。当時、喧伝されていた社会主義にも懐疑的で、高校生のころから「そんな夢の社会が存在するわけはない」と、冷めた目で見てたんです。そういうわけで二年生になるころには、大学でやるべきことがなくなつてしまつたんです。

山岡 それで、世界旅行に行くことを考えられたのですか。

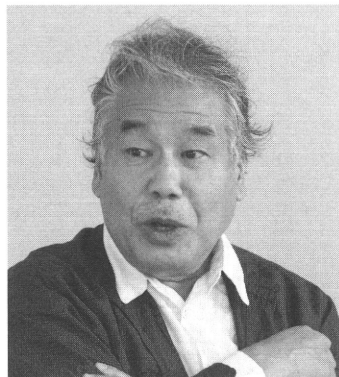
岩崎 ええ。そのとき、田舎に帰るか、東京でアルバイトをするか、長年の夢だった世界旅行をするか、三つの選択肢がありました。考えた末に、世界旅行に行くことを決意しました。

山岡 当時はまだ、世界旅行は珍しい時代だったのではないのでしょうか。

岩崎 海外旅行が自由化されたのは昭和三十八年。僕が海外に飛び出したのは昭和四十一年ですから、まだ、自由化から三年しかたつていません。その時期に一般市民で海外旅行した人なんて、まずいせん。本屋をのぞいても、世界旅行に関する本



山岡 三子さん



岩崎 紘昌氏

(2013年9月18日 吉祥寺第一ホテルにて)

なんかないし、情報は全くない状態でした。

山岡 予備知識がゼロの状態で、海外を旅行されるなんて、とてもチャレンジ精神が旺盛でいらしたのですね。

「何とかなる」でたどり着いたストックホルム——七五カ国を踏破

岩崎 というより、あまり深く考えずに、「行けば何とかなるだろう」という思いで気軽に出発しちゃったんです。今のような格安航空チケットもありませんから、横浜から船でソ連（現在のロシア）のナホトカに渡り、そこからシベリア鉄道でヨーロッパに向かいました。

はたから見れば無謀に見えるかもしれませんが、これは北海道人の気質かもしれませんね。北海道って、先住民のアイヌ以外はみんな本州からやってきた人たちで、僕の祖母は京都出身だし、祖父は福井出身。故郷を捨てて移住した人たちが多いので、海外に行こうがどこに行こうが、抵抗はありませんでした。だから、怖いもの知らずでさっさと行動できてしまう。それが北海道人の強みなのですが、そのせいで、大変

な苦労をするはめになりました。

山岡 海外ではどのような苦労をされたのでしょうか。

岩崎 当時、ソ連からヨーロッパに入れるのは、フィンランドのヘルシンキか、スウェーデンのストックホルムからだけでした。僕はストックホルムに行ったのですが、着いたとたん、とんでもないところに来ちゃったなと思いましたね。物価がものすごく高いんですよ。

当時、海外に持ち出しできる金額は一八万円までと決まっていました。大卒の初任給が三万円ほどでしたから、かなりの大金です。でも、ストックホルムに着くころには一二万円になっていました。そのなかの一二万円が見るうちになくなっていくんです。何しろホットドッグとコーラを買ったら、一〇〇〇円が消えとんでもない物価でした。これでは一週間もたないなとすぐに悟りました。

山岡 そうなると、世界旅行どころではありませんね。いったいどうされたのですか。

岩崎 海外送金ができない時代ですから、

働くしかないと思腹をくくったんですが、働こうにも言葉が通じないので困りました。

英語を読むことはできて、相手が何を言っているのがわかりませんから、コミュニケーションが必要な仕事には就けません。つくづく、高校時代に学んだ英会話のない受験英語を恨めしく思いました。

結果、ストックホルムで僕にできる仕事といえば、皿洗いぐらいしかなかったんです。ただ、皿洗いといってもけっこう稼ぐことができて、二カ月ぐらい働いて、およそ五〇万円が手に入りました。それほど日本との格差は大きかったんです。

山岡 そのように海外で働きながら、旅行の資金を稼いだのですね。

岩崎 ええ、お金がなくなったら、現地で働いて、また旅行を続ける。そういう生活を約二年間続けました。

ストックホルムから東ヨーロッパ諸国を回り、パリで働いたのち、今度は西ヨーロッパを回りました。ロンドンでもアルバイトをして、アメリカ大陸へ。ニューヨークでお金をためたあと、アメリカ大陸を回り、今度はアフリカ大陸に飛びました。その後

は、中近東をヒッチハイクしながら、東南アジアを経由して、ようやく日本へ。最終的に七五カ国を巡りました。

山岡 あらためてお聞きすると、とてつもない旅路ですね。

岩崎 そのおかげで、貴重な経験ができましたよ。中東ではホテルの部屋に強盗が押しかけたこともあります。ドア越しに、

「早くドアを開けろ」とすぐまれたのですが、もちろんドアは開けません。適当に受け答えをしながら、何とか時間を引き延ばしている、やがていなくなるんです。なぜいなくなるかというと、朝四時の礼拝の時間になるからです。強盗といえども彼らは信心深いですから、時間になるとモスクに行くんです。こうした経験に基づいた生きた知識、情報を得ながら、世界を回ったんです。

そのほかにもさまざまな経験をしましたが、私にとって最も大きかったのは、アンティークの世界を知ったことです。

山岡 なるほど。旅をきっかけとした知識や情報をベースに、将来の進むべき道も決まったわけですね。

皿洗いとボーイ以外で唯一の仕事が ロンドンのアンティークショップ

岩崎 実はこの旅の途中で、一度だけ、皿洗いやボーイ以外の仕事に就いたことがあります。それがロンドンのアンティークショップの店員でした。

日本で言うところの骨董屋ですね。本屋にアルバイトの募集コーナーがあつて、またま見つけたんです。詳細を読んでみると、皿洗いよりも賃金が高い。すぐに連絡をとると、運よく働かせてくれることになったんです。やってみると、世の中にはこんな商売があるのかと、驚きました。

というのも、開店前にお店の鍵を開けて、商品を磨いていると、ポストンバッグにお金をいっぱい詰めたお客さんが次々とやってきて、品定めをするんです。そして、気に入ったものがあると、高額な商品を躊躇なく購入していくんです。

僕から見たら古くさく見えるだけの時計が、目の玉が飛び出るぐらいの高値で取引引きされるのですから、衝撃以外の何ものでもありません。その経験が私の人生を決

定づけてしまったわけですね。

山岡 たまたまロンドンのアンティークショップで働いたことがきっかけになって西洋アンティーク評論家・岩崎紘昌さんが生まれるわけですね。

岩崎 ええ。つくづく、人生は偶然の産物だと痛感させられます。とはいえ、その時点では、骨董屋を一生の仕事にしようとは思いませんでした。

当初はいい就職先さえあれば、サラリーマンになろうかと思っていたのですが、世界旅行に出たために、卒業まで六年もかかっていますから、いい口が見つからない。

大学の就職課の職員からも「二年も遅れた学生には、いい就職先を斡旋することは難しい」と、はっきり言われました。

これでは、サラリーマンになることは無理だな、自分で何とかしなければいけないなと思ったときに、頭に浮かんできたのがアンティークショップの光景でした。「そういうえばロンドンには、あんなに稼げる商売があったな」と思い出したわけです。

それで、大学を卒業してすぐの昭和四十六年から、アンティークを生業にすること

にしたんです。

西洋の物をお店が都内で三軒だけの昭和四十年代

山岡 今では、街に数多くのアンティークショップがありますが、昭和四十年代の半ばはどのような様子だったのでしょうか。

岩崎 今とは全く違います。西洋の物を売ってお店は東京都内でも三軒ぐらい。そのうちの二軒は日本骨董が主流で、一部大理石やシャンデリアを置いている程度でした。現在ののようなアンティークショップは皆無でしたよ。

山岡 ということは、時代の最先端をいっていたわけですね。

岩崎 最先端といっても、前例がないから、苦労しました。第一、どのように商売をしたらいいのかわからないし、お客さんが来ないので、全然稼ぐことができませんでした。

最初は目白にアンティークショップを開店したのですが、訪れる人からは決まって「アンティークって何？」と聞かれたものです。それぐらい世の中に認知されていま

せんでしたね。

由緒正しい銀のスプーンを並べても「これ、どこから拾ってきたの？」と言われる始末。「パリやロンドンから買いつけたものです」と答えても、一般市民が海外へ行くことが珍しい時代でしたから、誰にも信じてもらえませんでしたね。「若いのに、あんなうそつきね」とまで言われたことがあります。

山岡 では、どうやって生活の糧を得ていたのですか。

岩崎 実は、当時の僕は「世界一周をした男」として、けっこうメディアでもはやされていたんです。

何しろ世界一周した人なんて、世の中にほとんどいなかったもので、旅の話をしてほしいと引つ張りだこでした。ラジオ局で二年間ディスコジョッキーをしましたし、『平凡パンチ』などの雑誌にもよく原稿を書きました。

人間はチャンスがあれば、何でもやるべきだなと思いますよ。学生時代の世界旅行の経験があったからこそ、アンティークショップをたたまずに済んだわけですから。

もし、そういう経験をしていなければ、それこそ、そそくさと田舎に帰っていたかかもしれません。

文化を楽しむ気持ちの余裕が生まれた 昭和五十年代

山岡 世界旅行の経験で生活の糧を得る期間は、わりと長く続いたのですか。

岩崎 およそ一〇年間はそんな感じでした。しかし、昭和五十年代半になると、それが一変するんです。

急に時代の風向きが変わって、店に並べているすべての商品が売れ出しました。もうそのころには「アンティークって何？」と聞いてくる人はいませんでしたね。

当時は、月に数回はロンドンのポートベロや、パリのクリニアン・クールなどの骨董街を訪れて、買いつけを行っていました。
山岡 急に売れるようになった理由は、何だったのでしょうか。

岩崎 やはり日本が豊かになったことが大きいでしょうね。

昭和二十年に終戦を迎えて、以来、私の親の世代は、体を壊すこともいとわずに

むしやらに働いたものです。そのおかげで生きることと精いっぱいという時代を乗り越えることができました。

もうそのころはテレビ・洗濯機・冷蔵庫の三種の神器も各家庭に行き渡り、生活にも余裕が出てきたころでした。それに伴い、しだいに文化を楽しむという気持ちの余裕も生まれたのでしょうか。昭和五十年代半ばになってアンティークが注目されたのはその証しなんです。

山岡 古い物をめぐる文化ですね。

岩崎 そう。自分が生まれる前から存在するコーヒーカップで飲んでみたい。この一〇〇年前の花瓶で花を生けてみたい。あの意味、一人の人間としてのアイデンティティや自己主張に関わる問題です。

懸命に働いて得たお金を、そうした楽しむのために費やすことができるなんて、すばらしいことじゃないですか。この楽しみは一〇〇円ショップの物では味わえません。

山岡 それはわかります。私の行きつけの喫茶店では、アンティークのカップにコーヒーを入れてくれるのですが、そこで飲む一杯のコーヒーは、私にとって特別のも

ので、その時間はとても豊かな気分になることができます。

おっしゃるとおり、その思いを一〇〇円ショップのカップで味わうことは難しいですよ。コーヒーを飲む機能としては十分でも、大量生産のカップでは、精神的にまでは満たされないように感じます。

岩崎 そうした古い物を尊重する気風は、年々強くなっているように思います。特に、これだけ新しい物がどんどん生み出される世の中に暮らしていると、なおさら古い物の良さが実感できるのだと思います。

実際、アンティークを見たり触れたりすると、どこか懐かしい気持ちを感じるでしょう。それが心地いいんです。

社会のスピードが速まれば速まるほど、ゆつたりとした気持ちをもちたい。平衡感覚を取り戻したいという思いが生じるのは人間の本能ですから、なおさら古い物が好まれるのではないかと思います。

パリの町並みを見ればそれがわかります。パリは新しい物があふれている一方で、古い物も大切にしています。だからそこから刺激を受けようと、観光客が世界中

から訪れるんですよ。

古い物と新しい物を両方取り入れているところに、パリという都市の懐の深さを感じます。

使いこなし、次代に受け継ぐものにその価値がある

山岡 世の中がどんどん進化する中で、昔と変わらない形で残っていくものがある。そこにアンティークのすばらしさもあるのかもしれないね。

岩崎 人間はどんなに長生きしようと、一〇〇年以上生きるのはまれです。しかし、物は大事に使ってあげれば二〇〇年、三〇〇年と残すことができます。自分の人生の中で使いこなし、次の代に受け継いでいくことこそ、価値があるのではないのでしょうか。そこに美学を感じてもらいたいと思って、長年骨董屋を続けています。

だから、せっかく手に入れたアンティークはなるべく使って、生活の中に取り入れてほしいんです。

山岡 それはぜひいたくですね。でも私なんかは、壊してしまわないか心配で、なか

な使用えそうありません。

岩崎 実は、その考え自体が間違っているんです。例えば、陶器を新聞紙にくるんで五年間物置にしまっておくとどうなるかという、それを取り出して、お湯を入れたとたん、割れてしまうんです。ガラスもそうで、万物は水で形成されているので、水分が飛んでしまうともろくなってしまう壊れてしまうんです。だから、むしろ日々使っていたほうが長持ちするんですよ。

山岡 そういうことは考えたこともありませんでした。

さらに、アンティークは具体的な「物」を通して、歴史や文化に触れることができます。ところもすばらしい点ですね。

岩崎 そのとおり。私もその点を最も重視しています。

実際、今のお客さんの目はとても肥えてきています。スプーンひとつとっても、その背景にある歴史などを当然のように知りたがります。これは「マッピン&ウェブ」社のもので、イギリスの王室御用達の品で、一九世紀には工房が創立されていたんですよ」といった説明がないと、購入してくれ

ないんです。

山岡 その物自体の価値に、それにまつわるストーリーや歴史などをプラスすることが大切だということですね。

岩崎 そうです。今日はたまたま「ボーギー」という品物をもってきていたのですが、これは一九一〇年から三〇年代にヨーロッパで使われたものです。どういう用途に使われたものかわかりますか。

山岡 小型のプローチのようなものです。表面がガラスで、きれいに模様が描かれています。初めて拝見する品で、全く見当もつきません。

岩崎 当時の人は、これを胸につけ、ここに花を一輪さして、男女でダンスするのに使ったんです。

ボーギー



山岡 すてきですね。想像するだけでも優雅な気持ちになります。

岩崎 当時のダンスホールやレストランには、たいいてい花が生けてあって、そこから花を一輪だけ摘み取って、胸にさすんです。銀で作ったもの、陶器で作ったものなど、さまざまな種類がありますが、もちろん今は作られていません。

ロンドンにもほとんどなくて、知り合いのアンティーク店の主人は、もはや博物館に展示されるレベルのものだというんですね。それぐらい珍しくなりました。

こういう物を見ると、いつたい、一九一〇年、二〇年代のヨーロッパはどういう社会だったのか、そのころのアメリカはどうだったか、日本はどういう時代だったか、興味がわいてくるでしょう。そういうことを並列的に語るのがアンティークを生業にしている者の仕事です。「物」を売りながら、文化や歴史について説明するんです。それをお客さんも熱心に聞いてくれる。

戦後六五年かかって、やっと日本もイギリスやフランスと同じレベルにまで来た。そう考えると感慨深いものがありますね。

山岡 お客様とも濃厚なやりとりをされるのですね。

アンティークを通じて社会や時代、人間の「奥深さ」を思う

岩崎 それが骨董屋としての醍醐味の一つです。アンティークを通じて、いろいろなお客さんと接して、お話をします。文化論なども戦わせながら、その背後にある「人間」の奥深さや楽しみについて情報交換するんですね。何年この商売をやっても、人間への興味は尽きません。私にとって、アンティークは「人間」を深く知る手がかりなんです。それが、学者にとっては学問であり、画家にとっては絵画ということになるのでしょうか。

山岡 「物」を通して人間を知る。世界の文化を知る。とても興味深い分野だなと思います。

岩崎 だから僕自身も手当たりしだいに本を読んで、知識を深める努力をしています。実際、物の買いつけをヨーロッパで行う際にも、こちらに知識がないと偽物をつかまされてしまいますからね。

若いときはよくそれで失敗しました。その繰り返しを通して、真贋を見抜く目を養うことができたわけですが。

今では八畳ある自分の部屋は本や資料でいっぱい状態で、寝るスペースは一畳ぐらいいです。ただ、現物を四〇年間見続けてきた者から言わせてもらうと、少し口幅つたいですが、研究者の専門著書はいささかおもしろみに欠けることがあります。事実の羅列ばかりで、その背景にある人間の営み、文化の姿が見えてこないものも多い。そこが少々残念です。

山岡 今やアンティークがすっかり定着してきましたが、古い物へのまなざしを通じて、世の中に「物を大切にすること」の大切さも浸透してきているのではないのでしょうか。

岩崎 戦後の六八年間は、日本人はがむしやりに働いて、大量生産・大量消費に伴う、使い捨ての文化を育んだ年でもあったと思います。いつでも文化の発展は二極化で進むのですが、やっぱりこれからは古い物を大事にする文化こそ尊重すべきだと思います。

ご家庭でも、掛け軸や置物などの古い物があるでしょう。その物を見ながら、これは祖父が大切にしていたものだと思ひ出す。それだけでも尊いことだと思ひますよ。

こういう話をする、すぐ本物が偽物かがよく話題になります。それは全くの別問題です。われわれ専門家は、偽物を人様に売ることはできないがために、鑑定をする必要があります。自分の家に伝わったものならそれ自体が歴史ですから、偽物であろうが関係ない。ずっと大事にしていくなさうと思ひますね。

山岡 岩崎さんは、これまで四〇年もの間、アンティークの世界で活躍されてきましたが、今後の方向性や展望なども、ぜひお聞かせください。

岩崎 非常に残念なことです。今後はアンティークは受難の時を迎えると感じています。年間三、四回は海外に買いつけにいきますが、ロンドンのポートベロもパリのクリニアン・クールも、ピーク時の半分が店じまいしてしまっています。

山岡 どういうことなのでしょう。

岩崎 古い物を売り尽くしてしまつて、

枯渇してしまつたんです。個人が所有して、アンティークがマーケットに出回らなくなつてしまつた。私が商売を始めた四〇年前は、まさかこのような事態が訪れるとは思ひもしませんでした。これが現実です。

不遜な言い方ですが、今までアンティークが出回つていたのは、二度の世界大戦があつたから。戦争が起ると、貴重な古い物もお金に換えるために、売りに出されるんです。そう考えると、これからはアンティークが市場に出回るとは少なくなるでしょう。より貴重になると思ひますね。

だからこそ、お客さんには、家にある古い物を大事にしてほしいと思ひます。

新たな経験を通じて

「当たり前が当たり前でない」ことを知る

山岡 最後に、学生へのメッセージをお願いします。

岩崎 今やこれだけグローバルな社会ですから、海外の情報も簡単に得られるようになりました。容易に旅行にも行けるようになりました。私の学生時代を振り返ると、隔世の感があります。でも、簡単に行ける

からこそ、今の学生は海外への興味や関心をもたなくなつていとも聞ひています。

山岡 確かに、日本の若者の「内向き志向」が指摘されていますよね。

岩崎 それはとてももつたないことです。若いうちに異文化に触れることは、とても重要なことです。事実、現地に行つて実体験をしないと、わからないことがいっぱいあります。日本のシステムや方式が世界共通だと思つたら大間違いですからね。パリのカフェでは、無料で水は提供されません。黙つていても水が出てくるのは日本だけ。さらに、レストランに男一人で行くと、席が空いていてもなかなか案内してくれない。三〇分は待たされるのが普通です。男一人だと、チップもあんまりくれないし……（笑）。

日本ではあり得ないことが世界では常識だつたり、日本では当たり前のことが世界では非常識だつたりする。そのことを知るだけでも、視野が広がると思ひます。いずれにせよ、学生の皆さんには、若いうちから新しい経験を積み重ねて、人生を楽しんでほしいです。